

「福島の農業の未来を語るシンポジウム」
開催報告

「福島の農業の未来を語るシンポジウム」事務局

「福島の農業の未来を語るシンポジウム」取材レポート

私たち「ふくしま 新発売。」情報員が、シンポジウムの取材レポートをお送りします。

第1部 シンポジウム「パネル・ディスカッション」

(取材: 藤田浩志 情報員)



去る11月5日、福島市公会堂等にて「福島の農業の未来を語るシンポジウム」が開催されました。生産・流通・消費など様々な分野の方たちが交流を通じて、福島の農業のこれからについて語り合うシンポジウムです。



会場には、農家や市場関係者、小売業者、研究者や学生、そして興味を持って当日参加された一般の方など、多数の方々が来場されました。



第1部の「シンポジウム」では、主催者である佐藤雄平福島県知事及びご来賓の柳澤光美原子力災害現地対策本部長よりご挨拶がありました。

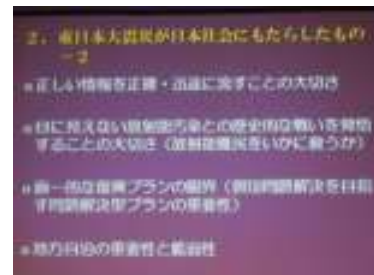
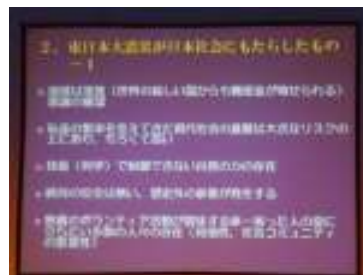
「パネル・ディスカッション」では、生産者、流通業、消費者などのそれぞれの分野から、福島県の農業の再生について、貴重な意見が述べられました。



専門家の視点で発言なさったのは、東京農業大学教授で同大学の東日本支援プロジェクトリーダーの門間敏幸さん。東京農業大学は「実学主義」という校是のもと、地震・津波・放射線被害という苦しみに見舞われている福島県の農業を助けるべく、様々なプロジェクトチームが活動を行っているとのこと。

今回の復興支援活動を通じて、現代社会の基盤は意外と脆く、技術では制御できない自然の力が存在することを、まざまざと実感したそうです。また、今回のような放射線被害の場合、情報を正確かつ迅速に流せなかったことが風評被害を広めた原因の一つであり、同じことを繰り返してはならない、と警鐘を鳴らされました。

その上で、地域や各農業者の置かれている状況は多種多様であり、画一的な復興プランは役に立たず、それぞれその数だけプランが必要であることを述べられたことは、まさに現場で支援活動された方だからこそのご発言だったと感じ入りました。



生産者の視点で発言なさったのは、有限会社とまとランドいわき専務取締役の元木寛さん。地震の影響で施設にダメージを被ったものの、施設の修復はなんとか済んだとのこと。ところが風評被害による影響は甚大で、当初は16トンものトマトを廃棄せざるをえなかったそうです。

そこで、風評払拭のため、3月の時点で放射性物質の自主検査を始め、国の暫定基準値よりもより厳しい独自基準を設けるなどして、信頼回復に努めたそうです。その甲斐もあって現在ロスはなくなったそうですが、やはり以前の値段には戻っていない現実があります。

今後、生産者としては、厳格な検査などを通じて、消費者の方々の不安の連鎖をいかに最小限に食い止めるかが重要課題であり、しっかりとした情報発信が必要であるとのご認識で、私も同感です。



流通・小売の視点でご発言なされたのは、株式会社いちい代表取締役社長の伊藤信弘さん。

いちいさんでは、いち早く放射性物質の検査器を導入し、現在まで1300検体もの検査を行っているそうです。実際に検査した原木しいたけから基準値の3倍程度の検出があり、いち早く県に届け出ることによって、市場流通することを食い止めることが出来たとのことです。また、農作物に限らず、全ての商品の検査結果を数値化することが目標であり、それぐらいの意気込みでやらなければ消費者の信頼を得ることはできない、とのお考えです。

重要なのは、情報を「見える化」することによって、安心を保証していくこと、そして万が一にも基準値越えの生産物を流通させないことだと発言されました。



消費者の視点でご発言なされたのは、福島県しゃくなげ大使で青森大学教授の見城美枝子さん。関西以西においては東北が遠いこともあり、問題意識に対するかなりの温度差があるとのことご認識があり、福島及び被災地の現状を日本の問題としてどう考えるかという視点が、国民的に必要であると述べられました。



各人のご意見を聞いたうえで、コーディネーターであり、元NHKキャスターでエッセイストの村松真貴子さんがディスカッションに導きます。

村松さんより、とまとランドいわきの元木さんへ、自主検査を行った際の費用とその効果について質問がありました。

最初の検査は3月19日。混乱の中、様々なツテを使って関西の検査会社をお願いしたとのこと。当時、状況が良く分からない中での検査だったため、検知できるすべての放射性物質について検査を行った結果、1検体10万円、大玉・中玉・ミニの三種類のトマトについて2回行ったため、60万円かかったそうです。その後、放射性物質汚染が放射性ヨウ素・セシウム134・137の3種類に絞られたため、現在は1検体2万円ほどで済んでいるそうですが、余計な出費であることに変わりはありません。ただ、その迅速な行動が大きな効果を生み出しました。

その取り組みをメディアが報道し、それが消費者の方々に広まった結果、多くの個人のお客様が応援の購入をしてくれたそうです。そこで購入の決め手となったのが、しっかりとした検査を行っていた実績でした。

ここでわかるのはしっかりと情報を「見える化」してあることが、風評被害の打破につながる可能性があるということでしょう。



次に、いちいの伊藤さんへ、野菜の検査について質問がありました。

まず、直接出荷している農家の農作物を無料で検査したとのこと。通常であれば、まずJAや市場において検査が行われ、小売ではその確認検査で済むところですが、まだ体制が整っていない現実があるのだそうです。

それでも、検査が行われるようになった後、地場産の野菜の売り上げは目に見えて上がったそうです。消費者の方々は、地場産の野菜の鮮度がいかに良く、かつ値段も手ごろであるか、よく理解しているためである、とのご意見でした。

すなわち、しっかりとした検査体制さえ整えば、地場産の野菜を購入したいという消費者の方々は、多数いらっしゃるということです。その信頼にお応えするためにも、生産・流通・販売の各段階での連携した検査体制の確立が求められます。

そこで、消費者の意見を見城さんに伺いました。

放射性物質が見えない以上、言葉だけの安全宣言等ではなく、やはり数字を公表していくことが重要であるとのこと。厳しすぎるくらいの対策を毅然として行うことが、信頼回復に必要ではないかとのご意見でした。その上で、個々に行うのではなく、全体で取り組む必要があり、被害者である福島の人たちは、もっと国に要求するくらいの方強さが必要ではないか、とのご提言がありました。

最後に、東京農業大学の門間さんに対し、このパネル・ディスカッションの総括を伺いました。

まず、技術として可能性のあることをチャレンジすること。そして、場所・状況に応じた技術をモデル化し、確実に成果が出るような形にすることが必要だ、ということ力を説かれました。机上の空論は何の意味もなさず、ましてや復興バブルのようなことを引き起こしてはならない、ということについても言及されました。

提案し、着実にいき、そして成果を出す。この地道な取り組みの繰り返しが、福島の農業の未来につながるのです。



現在の福島の農業は厳しい状況下にあります。ただ、それが故に大きな発言力を手にしてもあります。このような、ディスカッション等を通して、福島から声をあげること。それこそが、人々がつながっていく大きな力となり、より良い「日本」を「世界」を構築していくきっかけになることができる、そのような予感を大いに感じさせる、パネル・ディスカッションとなりました。

(取材: 藤田浩志 情報員)

有限会社とまとランドいわき
株式会社いちい

<http://www.sunshinetomato.co.jp/>

<http://www.ichii-yume.co.jp/>

「福島農業の未来を語るシンポジウム」取材レポート

私たち「ふくしま 新発売。」情報員が、シンポジウムの取材レポートをお送りします。

第2部 セッション「対話集会」

(取材:安田希代美 情報員)



福島農業の未来を語るシンポジウム～第2部「対話集会」の様子です。



シンポジウム終了後、会場からの参加希望者が壇上に上がり、「信頼の絆づくり」というテーマを引き継いで、パネリストの見城美枝子さん、村松真貴子さん、元木寛さん、県農林水産部の方々と共に、対話集会が行われました。



1グループ5～7人で、グループに分かれての対話集会です。



最初に、皆さん軽い自己紹介からスタート。
東京からの大学生や、農業普及員の方、元農機具販売の方、東京在住の心理カウンセラーの方、お父様が広島出身で被爆者の息子さんもいらっしゃいました。

ここで、ルール説明がありました。話を絞るためです。



シンポジウムのテーマ「信頼の絆から」



「今どんな繋がり＝絆が大切だと思いますか？」という質問に、各自、一言ずつ思いを書く事になりました。書いた後は、このようにグループごとに張り出されました。



- 本当に信頼できる情報の絆
- 先入観ではなく正しい知識の共有というつながり
- 県内と県外の人との信じあう絆
- 都道府県を超えるつながり

皆さん、とても良い言葉を書いています。

普段忘れがちな事を震災や原発事故で、改めて感じた事も多いのではないのでしょうか。起こってしまったことは変えられませんが、一人一人の行動によっては、何か出来ることがあると、私も思います。



浪江町で自営業をしていた避難者の男性が、「何かを変えるきっかけが欲しくて、このような場所に積極的に参加している。」と語りました。今は被災者同士で始められる事業の準備中だそうです。

次は心理カウンセラーの女性でした。「東京ではなくて、福島で生の声が聞きたかった。」と。



見城さんが「福島の人はおとなし過ぎる。もっと声を上げましょう。」と語り、『頑張ってください』とおっしゃった事が印象的でした。



最後に、今回シンポジウムのコーディネーターをなさった元 NHK キャスター村松さんが、「このような機会が沢山あり、沢山の人が出席すれば、皆さんの考え方が前向きになり何かを変えるきっかけになるのかもしれない。」と、おっしゃっていました。



今回私が感じた事。出席した皆さんに共通している事は、「福島をどうにかしたい」、「自分でも、何か出来るのではないか？」ということ。
この記事を読んでいる皆さんは、どう思いますか？

(取材:安田希代美 情報員)

「福島農業の未来を語るシンポジウム」取材レポート

私たち「ふくしま 新発売。」情報員が、シンポジウムの取材レポートをお送りします。

第2部 セッション 企画会議① 「新たなブランド価値づくり」

(取材:佐藤裕喜 情報員)



第2部のセッションでは、3つの企画会議のうち、「新たなブランド価値づくり」をテーマとした会場へ取材に行きました。

この企画会議は、原発事故の影響や風評被害により失った福島県産の信頼をどのように再構築していくか？、また情報発信システムや新しい認証制度など、新たなブランド構築のための方策について話し合うことが目的です。



進行役は中西紹一さん。中西さんは、コミュニケーション戦略開発プランナーとして企業活性化にかかわるコンサルティングなどの活動をされている方です。

中西さんは、まずインターネット社会における福島県の現状について検証されました。11月5日現在で、ヤフーで『福島』と検索した場合の該当件数は『約5億5千万件』。

『福島』にプラス『農業』で”約 2100 万件”、
『福島』にプラス『観光』で”約 5140 万件”、
『福島』にプラス『原発』で”約 4700 万件”、
『福島』にプラス『復興』で”約 2160 万件”、などの検索結果が出ました。

震災や原発事故が起きてから約8か月余りで、『福島+原発』は、『福島+農業』の倍以上の情報量となりました。また『福島』だけで検索した際に、『福島』に関してよく検

索されるワードが表示されますが、そこに表示されているのは『福島第一原発』、『福島原発』でした。これは現在ネットを利用される方の関心・意識がどこに、より強く向いているかを現しています。

この検証を踏まえた上で議論が進められました。



ブランド再構築に向けて重要な「安全」と「安心」をテーマとし、2つのグループに別れて議論が行われました。



その中では県独自の安全基準を作る、表示方法・ロゴやマークを新たに作るなど、様々なアイデアが出されました。そして情報のデザインに対する見直しなど参加者全員が意見を出し合い議論されました。

議論は進み、今回の議論の末に生まれた、アイデアのひとつは『売ってもらう』です。これは流通のステークホルダーに対して売り込み、使用してもらうことで広く多く、福島県産の美味しさ・安全性がアピール出来るためです。

今回、『福島＋農業』の情報を発信している立場として、ネットを利用する方々が一人でも多く『福島＋農業』に関心を持ってもらえるような情報を発信していかなければいけないと感じ、今後の取材活動に向けて、より気合が入りました。

(取材: 佐藤裕喜 情報員)

「福島の農業の未来を語るシンポジウム」取材レポート

私たち「ふくしま 新発売。」情報員が、シンポジウムの取材レポートをお送りします。

第2部 セッション 企画会議②「新たな連携づくり」

(取材:安田希代美 情報員)



第2部のセッションでは、3つの企画会議のうち、「新たな連携づくり」をテーマにした企画会議の様をお伝えします。

この企画会議では、新生ふくしまの復興に向けて、従来の枠組みを超えた、県内外の人々とのネットワークづくりをどう築いていくのかの話し合いが行われました。



進行役は NPO 法人日本エコツーリズムセンター代表理事の広瀬敏通さんと、東京農工大学生物システム応用科学府客員教授の福井隆さん。

広瀬さんは 1982 年にホールアース自然学校を開設され、国内の自然学校の草分けとして、国内外の多くの地で自然学校の仕組みづくりに関わり、環境教育の人材育成や地域づくりに奔走されています。東日本大震災では、被災者救援のために日本エコツーリズムセンターとして全国各地の自然学校等が集った被災救援のネットワークによって、RQ(レスキュー)市民災害救援センターを結成。心のケア、中長期の受け入れ、環境エコツアー等の支援活動も実施されています。

参加者は大学生、生まれてからずっと福島県に住んでいる方、仕事の関係で福島県に住んでいた方、岩手や宮城から来られた方、県職員など、様々な立場、様々な場

所から来た方々です。進行役と参加者達が双方向で対話すべく、三角形に机が配置され、全員がまず、『いまの福島県のイメージ』を一言でスケッチブックに書き、それについて自由に発言しました。



「放射能」、「腫れ物」、「根こそぎ」、参加者全員がネガティブなイメージしか持っていないと予想しましたが、中には「つながりをつくる機会」という前向きにとらえようという発言もありました。なかでも「冬」と書いた方の「いまは厳しいが、いずれ春が来る」という発言が印象的でした。

そして今度は、さかのぼって『3月11日の震災前のイメージ』。

「緑豊かで住みよいところ」、「ゆったり時間が流れているところ」、「ウインタースポーツができて楽しいところ」など、みなさん好印象を持っていました。なかでも福島在住の方の「普通に暮らしていた」という発言には意味深い印象を受けました。

震災が起こるまでネガティブなイメージが殆どなかった福島県ですが、震災以降はどうしても悪い面ばかりが報道されます。しかし、「世界中が注目する中でチャンスを見つける立場に立った」と語るのは、進行役の福井さん。

福井さんは、過去の水俣病がコミュニティに与える研究をしています。

水俣病はチツソという企業が廃液を海に排出し続けた結果、水銀が『海水』を汚染し、汚染された海に泳ぐ魚を食べた人間にも害が及びました。身体的な実害だけでなく、風評被害により就職もできず結婚を断られることもあったそうです。

福井さんは、この水俣病の問題と今回の原子力災害には「類似点がある」とおっしゃいます。『チツソ』が生産する『塩化ビニル(塩ビ)』は生活に無くてはならないものであり、生産ラインを止めることができませんでした。『東京電力』が生産する『電気(エネルギー)』も同様に、生活するうえでかかせないものであり、供給を止めることはでき

ません。放出された放射能は『水』ばかりでなく『空気』や『土』を汚染し、食物連鎖により『命』を脅かします。立ち入れなくなった場所では『時間』が止まり、そこに根付いていたはずの『歴史文化』を脅かします。



そして、この水俣病問題を先例にすることができる、と語ります。

水俣市ではこの公害を教訓として 23 分類ものゴミ分別を行うなど、環境への対策を重ね、現在では日本の環境先進都市として『日本の環境首都コンテスト』で 2 度、1 位を受賞するに至りました。

震災以降、福島県は放射線モニタリング情報の公開をはじめ、農業の風評被害に対して多くの取り組みを行ってきましたが、それでも風評被害は根強いものです。では、風評を払拭するためにはどうしたらよいのか。様々な立場の人が集まったこの会場では「私ならどうするか」、という提案を最後に行いました。

「マスコミを活用し、実態把握を容易化させる」、「数値データだけを発信するのではなく、意味を発信する」、「人と人を結ぶ情報発信＝顔の見えるネットワークづくり」など、様々なアクションの提案が出てきます。



これらの提案を実現させるべく、とりまとめとして具体的なアクションの提案がされました。

まずは出荷量全国1位の農産物を作るプロジェクト。

福島県の桃は震災以前から有名ですが、出荷量は全国1位ではありません。そこで、桃の旬の「8月」、震災が起きた「11日」に、全国の人が一人一つ桃を買うというアクションを行おうと提案されました。

題して、『ふくしま買わナイト』。

「ひとり、1アクション」、一人でできることは小さなことかもしれませんが、それをつなぐことで大きな力になります。福島県民が立ち上がるだけでなく、このような『ふくしまアクション』を全国で実施することで更なる連携づくりが始まります。

(取材:安田希代美 情報員)

「福島の農業の未来を語るシンポジウム」取材レポート

私たち「ふくしま 新発売。」情報員が、シンポジウムの取材レポートをお送りします。

第2部 セッション 企画会議③「新たな農業再生に向けて」

(取材: 藤田浩志 情報員)



第2部のセッションでは、3つの企画会議のうち、「新たな農業再生に向けて」をテーマにした会場を取材しました。この企画会議は、福島県の農業復興に向けた、農業経営のシステムや、生産者と生活者の絆づくりのための新しい取り組みを考えるものです。

進行は、シンポジウムのパネリストも務められた東京農業大学の門間さん。参加された方々は、農業者・消費者・行政・流通・小売・大学生、そして高校生もいました！まさしく、それぞれ立場の違う分野から多士済々の方々がお集まりになりました。



門間さんが課題として挙げられたのは、「福島農業の再生アイデア」。今後福島で農業を続けていくにあたってどのような農業経営を目指すか、そして消費者が求めていることは何かを考えそれに答えていくにはどうしたらよいか、そのアイデアを出し合うということです。

その中で門間さんが取られた方法は、ただ漠然とアイデアを出し合うことではありませんでした。まず時間を取ってそれぞれの参加者が自分の考えを紙に書き出し、それを自分がこれはいいアイデアであると思うものを一つだけ順番に発表するというものです。その上で、その発表されたアイデアに近いと思うアイデアをそのほかの方々が

提出し、門間さんが解説をつけ分類します。

この方法を取ることによって、アイデアをジャンル別にグルーピングすることができ、具体的かつ整理されたアイデア表が出来上がっていくのです。アイデアの深みや広がり・整理化・時間の効率的利用等の観点からも、実に素晴らしい進行だったと思います。



参加者の皆さんは、それぞれが皆熱い思いを持っており、それぞれの視点で本気で福島の農業をどうしていくかということを真剣に語りました。

一例をあげると、「福島県に農業特区を設定する」というアイデアが出たところ、「福島大学に農学部を設置する」「福島県を農業実験県にする」「農地の除染技術を開発し、普及させる」など次々と関連したアイデアが提出され、そこにアイデアのグループが形成されていきました。

各人が発表していくたびにアイデアが生み出され、あっという間に黒板が埋まっていく、それはあたかも福島の農業に希望が広まっていく様を表す芸術のようでした。



もちろん、それで終わりではありません。例えアイデアが出ても、それが机上の空論に過ぎないものである可能性もあるからです。そのため、そこで出たアイデアが一覧になった「アイデア評価表」を参加者に配布し、各アイデアに「実行可能か」「効果があるか」という2項目を5段階評価しました。これによって、そのアイデアに対しての客観

的な評価を行うことができ、具体的に進めることが出来るアイデアを選抜することが出来るのです。



今回の企画会議を通して、皆が力を合わせてそれを効果的に集約することによって、福島農業の再生を必ず果たすことが出来る、その確信を抱くに至りました。

(取材: 藤田浩志 情報員)

「福島の農業の未来を語るシンポジウム」取材レポート

私たち「ふくしま 新発売。」情報員が、シンポジウムの取材レポートをお送りします。

第2部 セッション 企画会議④(総括会議)

(取材: 藤田浩志 情報員)



第2部のセッションでは、3つの企画会議を「総括」する会場を取材しました。総括は、各会場の進行を務めた方々が、各議題のポイントをまとめる形で進められました。

まずは「新たなブランド価値づくり」を担当なさった中西紹一さん。福島への信頼をどのように再構築していくか、新生福島ブランド構築に必要なポイントについて述べられました。

◎どうやって見てもらえるか？

ブランド構築以前の問題として、まずは手に取って頂かなくてはならないということです。そのためには、信頼を得るための対策とその結果をオープンにしていくことが大前提なのです。

◎オピニオンリーダーをまきこむ

ブランド構築のためには、影響力を持つ方たちの賛同を得ることが必要。その人は単なる有名人ということではなく、「消費者から真に信頼される方あるいは組織」でなければならないということに注意すべきであることも指摘されました。

◎ぶれない基準

信頼というものは、その後の背信によって脆くも崩れ去ります。ゆえに、一度決めた基準というものは、より厳しくすることは良しとしても、ぶれてはならないのです。これはまさにいま最も求められていることではないでしょうか。

次は、「新たな連携づくり」を担当なさった、NPO 法人日本エコツーリズムセンターの広瀬敏通さん。復興のために、従来の枠組みを超えた、県内外の人々とどうネットワークを構築していくかについて、次のことを述べられました。

◎水俣と Fukushima

水俣市は、公害によって水・大地・空気を汚され、水俣病を発端とした対立もあり、地域が混沌に陥ったという過去があり、現在の福島もそれに近い境遇にあります。しかしながら水俣市は、40年にわたる不断の努力と行動によって、世界に冠たる「環境先進都市」に生まれ変わりました。その偉大なる先達の経験を生かすことによって、福島も再生することができるという考えは、私が以前から考えていたことと一致するものでした。

◎福島アクション 全国展開

どんなにいいアイデアも、行動しなければ意味がない。ゆえに、農家・主婦・行政・・・全員を巻き込んで、応援を見えるようにしていこう、とにかく具体的に動こう。そうです、行動しなくては何も始まらないのです。

◎8月11日 福島買わナイト

行動しようと思ったからには、それを具体化しようということで、日付を切って行動計画を決めたとのこと！何というダイナミズム！福島県の農作物はその全てが高いレベルにあるにもかかわらず、全国1位のものが残念ながら無いのです。では、「1位を作ればいいじゃないか」という発想から、福島の「桃」を8月11日に買ってもらうイベントを全国展開して、天下取りを目指す！考えただけでワクワクするイベントが提案されました！

発言の最後は「新たな農業再生に向けて」を担当なさった、東京農業大学の門間敏幸さんです。福島の農業再生に向けての提言として次の3つを挙げられました。

◎安全と安心の差を縮める

「安全」という言葉ばかりをアピールしているが、残念ながらそれが消費者の「安心」に繋がっていない現状があるので、「安全と安心の距離を縮める取り組みを促進する」ということは必須であるということです。そのためには、徹底した情報開示はもちろん、様々な事柄における「広域統一基準」を作り上げることが重要であるとも話されていました。

◎放射性物質との多様な戦い方・技術

残念ながら、放射性物質が飛散してしまった現実は変えようがありません。しかし、福島県内といえども、地域によってその重篤度は全く異なります。ゆえに、画一的な方法をむやみに押し付けるのではなく、その状況に応じて手段を変えるとともに、新たな技術の開発を行っていくことで、効率的に豊かな農地に修復していくことが求められます。

◎担い手(農・学・研究者)を福島に！！

このような状況下だからこそ、実践を通じた人材の育成が出来るともいえます。そこで、特区化や農学等のメッカとして基盤を整備し、人材供給都市を目指すような前向きな姿勢があってもいいのではないかという視点は、今まさに必要とされています。

最後に、3人の方々にこれからに向けて一言ずつ述べていただきました。

先ほどとは逆の順番に、まずは門間さんからです。

◎福島から世界へ

幸か不幸か、福島という地は大きな発信力を持つ地となりました。だからこそ、福島から放射性物質との向き合い方、安心・安全のあり方などを積極的に「世界」に発信して

いこう、そうです福島はそれが出来る立場を手に入れたのです。

次に広瀬さんから。

◎魂の除染は具体的行動で成す

科学的・医学的知見は別として、「フクシマは汚染されている」「フクシマと名がつくだけでもうだめだ」といったある種「観念」といったものは残念ながら多かれ少なかれ存在しています。しかし、それはただ「そんなことはない」と叫んだところで払拭されるものではないのです。それを促すのはただ具体的な行動のみというのは、私も実感として強く認識しているものでした。

大トリは中西さん。

◎売ってもらう

我々は、消費者の方々に「買ってもらう」ことばかり考えているのではないだろうか。それも必要だが、その消費者の方々に届けてくれる「流通」への対応が弱すぎるのではないだろうか。もっと「売ってもらう」ための仕組みづくりをして、流通キャンペーンをしていこう。

これは確かに、ハッとさせられる一言でした。

福島県の現状は予断を許すものではありません。しかし、未来が無いのかと言われればそれは「NO」です。なぜならば、今回のシンポジウムを通してわかったように、視点を少し変えると、「ハンデ」が逆に「付加価値」変わるからです。

福島県は大きな可能性を秘めています。少人数ではそれを開花させるのは難しいかもしれませんが、多くの方々の知恵と力を借りれば、大きな成果を生むことが出来る、それをこの「福島県の農業の未来を語るシンポジウム」は示すことができた、そういっても過言ではない素晴らしいシンポジウムとなりました。

(取材: 藤田浩志 情報員)

「福島の農業の未来を語るシンポジウム」取材レポート

私たち「ふくしま 新発売。」情報員が、シンポジウムの取材レポートをお送りします。

第2部 セッション「農村訪問」

(取材:芳賀智子 情報員)



第2部のセッションの内、私は「福島」の現状を見て考える「農村訪問ツアー」に同行させて頂きました。

参加者は東京農業大学の学生さんと留学生、それから地元の大学生もいらっしゃいました。福島市公会堂を出てまず向かったのは、福島市飯坂町にあるあづま果樹園さん。移動中、農大生にお話を聞いてみました。

Q. 福島に来たのは初めてですか？

A. 「小さい頃に、南相馬市に行ったことがあります。福島市は初めてです。同じ福島県でも街並みがだいぶ違うんですね。」

そうなんですよね。福島県は、浜通り・中通り・会津地方の3地方に分かれていて、それぞれ海・街・山と特徴が分かれているので同じ県でも方言や人の雰囲気もだいぶ違います。

Q. 現在の福島へ来ることに抵抗はありませんでしたか？実際に来てみていかがですか？

A. 「とくに福島へ来ることへの抵抗はありませんでした。こんなに普通に街が動いているとは思いませんでした。」

Q. 首都圏で福島の野菜を目にしたたり、手にすることはありますか？

A. 「最近、野菜に産地が書かれて販売されているんですが、私たちには土地勘がないので、『福島県〇〇市産』と書いてあっても『福島県産』としか入ってこないんですよね。福島県はこんなに広いけど、福島＝危険かな？と思ってしまいます。」

確かにそうですね。私たち福島県民でも、「〇〇町ってどこだっけ？…会津の方だよね？…いや、福島市の下の方じゃない?!」という会話が交わされるくらい広いで

すから。今後は、福島県の地図に場所を記したものや、数値を記載して販売して欲しいなどの要望がありました。

そうこうしている間にあづま農園へ到着！
真っ先にリンゴ農園に案内して頂きました。



あづまさんのお話をお伺いし、さっそくリンゴ狩りを体験させて頂きました。
こちらでは、季節ごとにいろんな果物狩りが体験できるそうです。
さくらんぼ、もも、ぶどう、梨、リンゴと6月～11月ぐらいまで体験できます。

参加者の方々からあづまさんへの質問です。

【質問内容】

Q. 震災が起きて、どれぐらい被害を受けましたか？

A. 地震の影響はほとんど無かったのですが、原発事故の影響により6月のさくらんぼは9割減。1日に10台、土日30台来ていた観光バスが、今年はシーズンで15台弱ぐらいでした。あづま果樹園のある場所はフルーツラインと呼ばれていて、通常観光バスがたくさん行きかう場所なのに、今年はほとんど見なくて寂しいです。

Q. ここにあるリンゴに含まれる放射能は？食べても大丈夫ですか？

A. ちゃんと県で調べて、安全が確認されたものを販売していますので、安心して食べて下さい。

Q. 観光客がこちらへ来て購入する以外に、販売先はありますか？

A. 今年は観光客が少なく、店に置いておくだけでは腐ってしまうので、県外へ販売に行きました。今までは出張販売する暇がなかったけど、今年は東京・千葉・埼玉・神奈川で東北を応援してくれるお店さんが、うちで販売していいですよ！と言ってくださって、福島に来てもらえない分、自分たちで出向いて販売してきました。何度も何度も行きましたよ。

「自由に食べてみてください！赤いところを探してみてくださいね！」という言葉に、おいしそうなリンゴを探してみんなのテンションはMAX。

リンゴに傷をつけないように、リンゴを優しく回しながら斜めにポキッ！



Q. 普段食べているリンゴと比べていかがですか？

A. 「とにかく甘いです！こんなに甘いリンゴを食べたのは初めてです。おいしい！」と、同じコメントがあちこち飛び交い、ざわめきがおこりました。



私も頂きましたが、本当においしい！

次は、あづま果樹園さんのお店へ。



店内には、発送用の果物がズラリ。

果物狩りを体験したお客様がお土産に買われたり、親戚へ送ったり。私が昨年、さくらんぼ狩りにお邪魔したときも発送希望される方がたくさんいらっしゃいました。



↓ 現在もリンゴや柿、ラフランスなどの発送を行っておりますので詳しくはこちらへ

あづま果樹園⇒<http://www.dab.hi-ho.ne.jp/aduma/>



楽しい時間はあっという間で名残おいしいですが、次の場所へ向かいます。

到着したのは、農産物直売所「こころ」さん。



店内を散策したあとは、JA 新ふくしま営農部直販課課長 石渡さんにお話を伺います。農産物直売所「こころ」さんは、市内に7店舗。地産地消にこだわっていて福島市と川俣町で獲れたもののみ販売しています。



積極的に質問する方が沢山いらっやって、今の福島県への関心の高さ、真剣さが物凄く伝わってきました。



【質問内容】

Q. 震災直後の野菜の値段は震災前と変わりましたか？震災による影響はどのようなものがありましたか？

- A. 原発事故によりほとんどの野菜が出荷停止になってしまい、何を売って良いのかわからない状況に立たされてしまった。春先だったので果物もあまりないし、店頭に並んでいたのはねぎなどの土ものばかり。お店として並べるものがなくては困るので緊急会議を開き、やむを得ず今年初めて市場から農産物を仕入れる手法をとりました。直売所ならではの新鮮さを提供することが出来なかったことが悔やまれます。値段はきゅうりが1箱20円まで下がり、桃は例年の半額くらいに。そして、例年だと観光客の多い5月に観光客の姿が見られなかった。ここは普段、県外ナンバーでうまる場所なんです。夏休みぐらいからようやく徐々に観光客が戻り始めています。

Q. こちらの直売所ではどんなものが良く売れますか？

- A. 7~8割が観光客のお客様なので、野菜より果物が良く売れます。

Q. 4月に初めて市場から仕入れたと伺いましたが、普段はどのようにして仕入れているんですか？

- A. 農家の方が直接もってきてくれます。1300人のJA会員がいらっやいまして、農

家の方は7店舗のどこに出しても良いんです。むこうで売れなかったから今日はこっちとかでもOK。各直売所に直接野菜を持ち込みます。

石渡さん、ありがとうございました！

JA 農産物直売所こころ 吾妻店⇒<http://www.shinfuku.jp/cyokubai-azuma.html>

出発からあっという間に2時間が過ぎ、一行は公会堂へと戻ります。

Q. 今日参加してみていかがでしたか？

- A1. 「楽しかったです！農業のこれからを私たちも真剣に考えたいと思いました。」
- A2. 「出荷できないとされた農産物が廃棄されていると聞いてショックでした。農家の方の気持ちを考えると心が痛いです。」
- A3. 「福島に来る機会を頂けて良かったです。福島の良さを知ることができました福島に来たいと思いました。福島大好き！」
- A4. 「シンポジウムに参加出来て、とても勉強になりました。またこういった機会を設けて頂けたら嬉しいです。」
- A5. 「自分達の作った野菜を廃棄する気持ちに耐えられず農家を辞めてしまった人がいるという話を聞いて、とても悲しくなりました。」
- A6. 「被災地支援が薄れてきた昨今ですが、現場を見てまだまだ支援が必要だなと感じました。」
- A7. 「この経験はとても良かった。福島の方は優しい。楽しい。明るい。ありがとう！」

(取材:芳賀智子 情報員)

「福島の農業の未来を語るシンポジウム」取材レポート

私たち「ふくしま 新発売。」情報員が、シンポジウムの取材レポートをお送りします。

和紙メッセージ・ワークショップ

(取材:芳賀智子 情報員)



「福島の農業の未来を語るシンポジウム」では、福島市公会堂のロビーで、和紙ワークショップの國高ひできさんがいらっしゃって、「和紙によるメッセージ・ワークショップ」ブースが設けられておりました。

こちらでは、紙漉きで絵を描く新しいアート、『KAMISUKI』が体験できます。現在、國高さんは各地のイベント会場を巡り、被災者に対する応援の気持ちを漉きこむワークショップを開催しております。200枚の作品を一枚のタペストリーにして「被災地のクリスマスに元気を届けよう！」という計画なさっているそうです。

KAMISUKI タペストリープロジェクト⇒http://washizokei.jp/imagine_ws.html

國高さんの活動はこちら⇒<http://washizokei.jp/>

それではお話をお伺いしながら早速体験スタート！
まずは國高さんがお手本を見させていただきながら…。
始めに土台となる和紙を作ります。

用意して下さったのは、和紙の原料である『楮(こうぞ)』と水・ねりを混ぜたもの。
この日の楮は、福島県産(二本松市)のものを使用して下さいました！ちょっと高級品

☆



こちらの原料を小さいボール一杯分すくい、注ぎ口を枠にあて勢いよく流し込みます。



枠を傾けて、繊維が全体に広がるよう調整していきます。



私も体験させて頂きましたが、ぎこちなく…國高さんも不安そう…(・__・;)
これを繰り返して行い、後半は斑になった部分を調節し、まずは土台の完成。



この上にこれから、絵を漉き込んでいきます。絵の具になるのは、染色した楮。赤・青・黄の3原色を混ぜて自分の好きな色を作成していきます。



ヒモで形を作って、そこに色のついた楮を流し込んでいきます。



何度も繰り返すことによって繊維が重なり、色が濃くなっていくのがわかります。



細かいところは、道具を使って繊維を掬い取って置いていきます。



なんとか完成。



木の板に貼って2時間程乾かせば出来上がりです。

植物の繊維で描くのは水彩絵の具や色鉛筆で描くのはまた違って、一本の線を描くのにも何度も何度も繊維を重ねやっとなんて完成します。

結構根気のいる作業です！！國高さんのプロジェクトに参加して下さった皆さんも心を込めて作って下さったことでしょう。

シンポジウムやセッションに参加した方々が、「KAMISUKI」を体験されていました。



今日の思い出を作品にする方も☆



各地から寄せられた作品には、「再生の願い」が漉きこまれ、被災者の作品には「明日への希望」が漉きこまれているそうです。私も毎日笑顔でいたいという願いを込めて「スマイル」にしてみました☆☆☆そんな沢山の思いの詰まった贈り物が、被災地のクリスマスに届くなんて素敵ですね♪



これからも被災地を廻りたいとおっしゃられておりましたので、またお会いできる日を楽しみにしています。福島の子供たちにも沢山の笑顔を届けてあげてください。



～日本和紙造形研究所から～

皆さんの街でも、和紙造形ワークショップを開催してみませんか？

皆さんに用意して頂くのは、場所の確保と参加者！

日本の伝統に触れてみてください。

（取材：芳賀智子 情報員）

詳しくはコチラ⇒<http://washizokei.jp/zworkshop.html>